1977年12月3日第三種郵便物承認（毎月18回1・2・3・5・6・7の日発行）2025年8月24日発行 SSKP 通巻第8771号

SSKP プリンシプル

相模原ダルクニュースレター　第50号（2025年9月）

悲願の初優勝 ～チーム一丸となった奇跡～

一般社団法人相模原ダルク　代表理事　田中秀泰

本年６月２６日、関東近県のダルク１２チームが参加するダルク対抗フットサル大会において、我が相模原ダルクが悲願の初優勝を果たしました！サッカー経験者がわずか２名という状況でしたが、日々の多忙な仕事の合間を縫って集中した練習を重ねてきました。選手一人ひとりが本当に頑張ってくれ、大会当日は約６０名の利用者の皆さんと共に、私も応援席から熱い声援を送らせて頂きました。試合を見ていて心に深く響いたのは、施設長の酒井君のリーダーシップに選手全員が素直に従い、チーム一丸となって戦う姿でした。この光景を目の当たりにして、まさにダルクが取り組む最も重要な課題である、「依存症からの回復」そのものだと実感しました。回復の過程では、仲間を信じ、指導者を信じ、そして何より自分自身を信じることが不可欠です。今回の優勝は、単なるスポーツの勝利を超えて、私たちの回復への取り組みが着実に実を結んでいることを証明してくれました。この感動と誇りを胸に、これからも皆で歩み続けていきます。

一般社団法人相模原ダルク　施設長　酒井勇輔

ダルクは仲間たちとのつながりを大切にしています。依存症という病気が進行してくると、依存症者は孤立していきます。すると以前よりアディクションにのめり込むようになり、なおさら孤立が深まっていきます。多くの依存症者が、孤立とアディクションの負のスパイラルを経験しているでしょう。ここから抜け出す方法、それはつながりをつくることです。そのつながりこそが、アディクションに対抗できる力なのです。今回はそんなダルクらしいイベント、ダルク対抗フットサル大会に参加してきました。結果は優勝！みんな本当にがんばりました。しかし、優勝以上に得られたもの、それは仲間とのつながりでした。みんなフットサルが得意なわけではありませんが、たくさん練習しました。練習してうまくなったわけではありませんが、私たちの仲は深まりました。プレー中は、出身も、年齢も、依存症の種類も、クリーンタイムも関係なく、一体となって取り組みました。大会では、他のダルクの仲間と競い合い、そして、称えあいました。一緒にプレーしてくれた仲間、対戦してくれた仲間、応援してくれた仲間、運営をしてくれた仲間、ありがとうございました。私たちのつながりは、少しずつ強くなり、少しずつ広がっていくのです。そんな今日一日の積み重ね、これがダルクの回復なのです。

『ダルク対抗フットサル大会優勝』

相模原ダルク職員　比留間　駿

アルコール依存症のシュンです。今回はフットサル大会のことを振り返っていきたいと思います。私たち相模原ダルク一同は、６月２６日栃木県の日環アリーナで開催されたダルク対抗フットサル大会に参加してきました。この大会には、全部で１２チームが参加し、激しい戦いを繰り広げました。結果としては得失点差で見事に優勝を飾ることができましたが、それ以上に私にとって価値のある経験と学びが詰まった一日でした。

フットサル大会が今年も開催され、相模原ダルクも参加すると聞いたのは、遡ること３カ月前の３月中頃のことでした。この話を聞いたときに「今年もフットサルの時期が近付いてきたか、、、」と憂鬱に思う反面、去年準優勝で終わってしまった悔しさを思い出しました。去年は決勝リーグまで負け無しで駒を進めましたが、最後に埼玉ダルクに負けてしまい準優勝という形でした。「今年は優勝するぞ！！」という強い思いで練習に取り組みました。練習の中ではショッキングなことが多々あり、一番大変だったのは体力面です。私個人的に、昨年の７月頃から業務のため、運動系のプログラムには参加することができず、またデスクワークも増え身体的にも少し落ち込みを感じていました。それでも週に２回という練習を重ねることで、少しずつ体力が回復していき、自信も取り戻していきました。練習は決して楽ではありませんでした。特に、体力が落ちていた最初のころは、息切れや筋肉痛に悩まされとても大変でした。しかし、練習の中で良いこともたくさんありました。フットサルというスポーツは、私にとっても特別な存在です。実は私自身、学生の時に野球を９年間ほどやっていて、体を動かすこと、仲間と一緒に汗を流すことの喜びを知っています。今、形は違えども、フットサルを楽しむことでその感覚を少しずつ取り戻しています。充実した日々が、とても思い出に残っています。大会の当日、会場には緊張と期待が入り混じる空気が漂っていました。第一試合の川崎ダルク戦は初戦という事もあり、仲間の緊張感がひしひしと伝わってきました。結果としては２－１で勝利し、その後も順調に勝ち進め決勝リーグに無事進めることができました。そして今年も埼玉ダルクと決勝リーグでぶつかることになります。埼玉ダルクとの試合は両者一歩も譲らずとても白熱し、結果は１－１と同点でした。実際にプレーをしていて、「あと一歩のところでゴールが決まる」や「キーパーのナイスセーブが無かったらゴールを決められていた」というシーンが何度もありました。その後二試合とも危ない場面はたくさんありましたが無事に勝利し、結果的に相模原ダルクは得失点差で優勝という形で幕を閉じることになりました。今回のダルク対抗フットサル大会を通じて、仲間との連携や信頼がいかに重要かを改めて実感しました。プレーの上手さだけでなく、互いに励まし合い、支え合う姿が、私たちのチームの強さを象徴していたのです。また、一つ一つのゴールやディフェンスの場面に、私たちの回復の経験が重なって見えました。依存症からの回復は、決して一人で乗り越えることはできません。

私たちがここまで来られたのは、仲間の存在や支援者の理解があるからこそだと思っています。フットサルの試合中も、失敗しても諦めずに仲間が声を掛け合い、次のプレーへとつなげていく姿は、まさに回復の過程と重なるものでした。試合を振り返ると、勝利だけでなく、そこに至るまでの過程に多くの学びがありました。チームワークの重要性、コミュニケーションの大切さ、そして何よりも「仲間と共に歩むこと」の大切さを実感しました。依存症からの回復には、自分一人だけの力だけではどうしようもできません。仲間とともに励まし合い、支え合う中で、初めて自分の弱さを受け入れ、乗り越えることができるのです。一人で戦うのではなく、仲間と共に歩むことで、回復の道を歩んでいけます。さらに、個人的にこの大会を振り返ると、自分自身の変化も見えてきました。かつてはアルコールに頼り、孤独に苦しんだ日々もありました。でも今は仲間と共に汗を流し、勝利を喜び合うことができています。この経験は、私にとって何よりの回復の証です。依存症からの回復は、ただ薬や治療だけではなく、人生を豊かにする新たな生き方やつながりを築くことだと実感しています。最後に、普段より支援いただいておりますすべての関係者に感謝申し上げます。私たちのフットサル大会優勝というのは、シンプルなスポーツの結果ではなく、依存症を乗り越え、再び人生を取り戻すための勇気と希望の象徴です。これからも支えあいながら、仲間と共に回復の道を歩んでいきたいと思います。

1977年12月3日第三種郵便物承認（毎月18回1・2・3・5・6・7の日発行）2025年8月24日発行 SSKP 通巻第8771号

『川遊びと心のリカバリー』

サチ

皆さまこんにちは。薬物依存症のサチです。この度はニュースレターを書く機会を与えて頂きありがとうございます。今回は７月１３日に相模原ダルクの月間行事として、道志橋のたもとで川遊び&釣り＆ＢＢＱをしてきたのでそのことについて振り返りたいと思います。

僕の遊びと言えば、覚醒剤、女、金がつきものだった。腹の底から笑ったり、楽しんだりが少なかった。本能の赴くまま遊び、現実を逃避していた生活が長かった。思い通りに行かないと、イライラして、当たり所が無いので困ってしまい、感情が激しく揺れながら荒々しく生きていた。だんだんと気持ちは不安になり、一人の時間が多くなってきて、心のわだかまりを誰にも話すことが出来なくなって、生き辛くなっていく毎日。笑顔を忘れてしまっていた。まるで心の中から愛が抜けて、シャブに心が奪われたように……毎日が過ぎていった。そんな僕が今回は川遊びを通じて、色々なことに気づき、感じることがあった。

僕がダルクに来て２年６カ月が経ち、川遊びのプログラムには何度か参加している。今年も７月に川遊びに行ってきた。カンカンと照りつける太陽の下、緩やかに流れる雲、魚や昆虫採集、夏の暑さには丁度良い川の冷たさ、仲間と共に作り食べる食事の美味しさ、限られたプログラムの時間では物足りない楽しさを満喫することが出来た。大人になり、シャブに心を奪われていた僕が、ダルクのプログラムを通して童心に帰り、大声で叫び楽しむことができ、心の底から笑うことができるようになった。シャブを使い続けていたら、川遊びは勿論、人とかかわる事もなかったと思うし、笑うことも楽しむこともできなかっただろう。でも今はシャブから遠ざかった生活を、同じ依存症の仲間たちと共に歩んでいる。一人で居た頃とは違う。沢山のかけがえのない仲間に囲まれている。仲間の姿を見ていると、色々な感情が湧いてくる。嬉しい、楽しいという明るい感情や、怒り、悲しみという暗い感情が湧く。達成感や充実感といった感情を思い出させてくれる。昔は寂しさや悲しみの感情を隠し、怒りとして出してきたことを気づかせてくれる。今は、仲間に頼ることや相談することが恥ずかしいとは感じなくなった。むしろ、必要だと感じる。誰かに心を開くことが解決の糸口であることが分かった。自分の中で思っているだけでは伝わらない。聞いてもらえるだけで嬉しくなる。最初は毛嫌いしていた仲間たちを少しずつ好きになり、現在は愛することも出来るようになった。感謝する気持ちが積み重なっていき幸せを感じるようになった。今は仲間の存在が、僕を明るく楽しい道へ導いてくれる。

ダルクに来る前は、依存症という病気はすぐに治るだろうし、自力で治せると自負していた。しかし、身体は元気になっても、依存症は完治しないことを知った。理由は、１日で薬物依存症になったわけではないから。だから依存症からの回復、すなわち自分を見つめ直す作業をどうおこなっていくかが大切だ。「うさぎとかめ」のかめになるしかない。時間をかけてゆっくりと回復の道を進むことで自分自身を変えていくしかない。そして、困難な状況から立ち直り、満足のいく人生を再構築するには、仲間が必要不可欠だ。シャブの強烈な記憶の上に、シラフの状態での仲間たちとの嬉しい記憶、楽しい記憶を上書きしていく。仲間からの笑顔、そして愛が必要なのだ。

僕は今、心のリカバリーの途中だ。普段から、心や気持ちを落ち着かせるように一日を過ごすことを心がけている。心に波紋が起きそうになった時には、仲睦まじい親子を見ることや子供たちが元気に遊んでいる姿を見ることで気持ちを切り替えるようにしている。今回の川遊びでも近くで元気にはしゃいでいる子供の姿に力をもらうことが出来た。自分自身の感情が豊かになってきている実感がある。仲間に心を開き、心を寄せ合う。仲間の愛に触れることで、なくしてしまった愛を取り戻す。仲間の話をゆっくり聞く。自分を仲間に委ね、なんでも自分の事を包み隠さず話す。一人ではない、悩む前に話してみる。考える前に相談してみる。仲間が背中を押してくれて勇気をくれる。希望をくれる、焦らずに行こう。そしていろんなことにチャレンジする毎日。一日一日が充実している。シャブに頼らず仲間に頼る。仲間と居ると面白い。仲間と居ると時間が過ぎるのが早い。今日はどんなことが起きるのか、朝からワクワク。一日を楽しみながら過ごす。仲間の笑顔と共に。

丁度このニュースレターを書いている時に、近所で花火大会が開催されていた。夏の風物詩でもある花火を見て癒された。忘れていた笑顔や笑い声、ゆっくり流れているように感じる時間。僕の心のリカバリーはこれからも続く。

『私の体験談』

イワ

「被告人を懲役１年６カ月に処する。但し刑の執行を３年間猶予する。」昨年７月９日、私に下された判決です。私の依存物は、覚醒剤です。小中高とＴＶドラマで観ていた教師に感化され、国語教師を目指し大学の文学部に入学した際、空手部では無く同好会に所属しました。今になって思えば、その同好会に所属してしまった事が自分の分岐点の一つだったと思います。空手とは程遠い、愚連隊の集りで、朝から晩迄ずっと麻雀をしている先輩の使いっ走りの毎日でした。２年生になったある日、１人の先輩が私に向かって「打て！」と言って来ました。打てと言っても麻雀では無く、注射器に入った覚醒剤の事です。私の父は暴力団で、幼い頃から人が指を切る所、暴力、怒声、そして薬物等を見て育って来た為、普通の人の感覚と違い見慣れてしまっています。ですが自分の体に薬物を入れたいと思った事は無く、いくら先輩に言われたからといって素直に「はい」とは言わず物凄く抵抗しました、が、５～６人に羽交い絞めにされ打たれてしまいました。糞尿を漏らしてしまった私を殴る蹴る等し、その後３日間監禁された後に解放されたのですが、同時に覚醒剤の物凄い気持ち良さ、高揚感を覚えてしまった自分が居ました。薬の快楽を覚えてしまった私は、在学中に購入しながら通学をしていましたが実家を出て１人暮らしをし、バイトをしながら大学に通うことは金銭的に苦しくなり、自主退学をしました。運良く自動車メーカーに就職する事が出来ましたが、覚醒剤の魔力には勝てず仕事をしながら薬を使う日々でした。頭では、このままではいけない、と正気の自分、薬の快楽に溺れてしまっている狂気の自分。矛盾している事は頭で理解していても狂気な考え、快楽に勝てずにズルズルと浸っていました。当時、自分が既に依存症という病気にかかっているとは毛頭思ってもいませんでした。自分では、薬をする時、仕事とコントロール出来ているから大丈夫だ！と狂気の考えを正当化していたのだと今になって痛感しています。

その後８年間、薬の使用を止めていたのですが、人間関係、仕事でのイライラ、ストレス等が溜まってしまい使用を再開させてしまいました。今迄、薬を使っていた時は、先輩や一人でしていましたが薬を使用して女性と交わる事を覚えてしまい、薬イコール女となって、どんどん深みに嵌ってしまい、当時７０キロ台だった体重が５０キロ台に減って周囲からガンを疑われる程ゲッソリと痩せ細ってしまいました。知っている方もいると思いますが覚醒剤を使用すると「何日も眠らず、食事も摂らず」といった事が可能に成り、「一つの事へ集中出来る」という良い事尽くめに聞こえますが、薬の効能が切れて来ると、物凄い眠気、飲み物食べ物への渇望、そしてイライラしてしまい、人間関係の崩壊へと成り孤立してしまい周囲から見向きして貰えず、その全てから解放されたくてまた薬に手を出してしまう負のスパイラルとなってしまいます。それだけで済めばまだ良い方で、そのまま薬を使い続けていれば、幻聴幻覚に悩まされたり、幻聴幻覚で人を襲って殺人事件へとなり兼ねません。仮に幻聴幻覚が無いにしても周囲への勘繰りをしてしまったり、仕事を休んでクビになり薬を購入する事が出来なくなって資金繰りに困り、犯罪に手を染めてしまう事になってしまいます、私の場合は、たまたま幻聴幻覚、勘繰り等が無く仕事を休む事をしなかったので会社や家族へバレずに薬と仕事を上手にコントロール出来ていると勘違いを長期に渡り繰り返していた為、売人との電話を警察に傍受され、内偵捜査となり、令和７年４月１０日の早朝、仕事に行こうと原付に乗った時に９人の刑事に囲まれ家宅捜索され、妻の目の前で逮捕される事になってしまいました。勿論、妻は私が覚醒剤を使っていた事なんて知らなかったので家の中へ９人の警察官が入って来た事、私が薬を使用していた事、目の前の出来事でパニックとなっていました。私は妻が驚いた顔を一生忘れません。そんな私の為に妻は裁判で情状証人に立ってくれて、更に検察官から「見捨てようとは思わないのですか」と聞かれた際に即答で「見捨てるなんて有り得ません」と言ってくれた事は私にとって一生の宝物と成りました。色々と書きましたが、覚醒剤とは一瞬の快楽を得る事が出来ますが、購入する事、体に入れる事、全てが犯罪であって良い事など一つも無いのです。“百害あって一利無し”なのです。

ダルクに入所させて頂き毎日、仲間と楽しく生活させて貰っていて、その最中で依存症が止まって居るという事は本当に有難いし感謝しています。待ってくれている妻と５男４女に対して本当に申し訳無いと毎日猛省していますが、まだまだ回復中の身なので退寮する事は出来ません。いずれは施設を出て家族の元へ帰りたいと思っています。そして幸せに暮らしていきたいです。ここ迄、こんな私の文章を拝読頂き有り難う御座いました。

1977年12月3日第三種郵便物承認（毎月18回1・2・3・5・6・7の日発行）2025年8月24日発行 SSKP 通巻第8771号

ダルク対抗フットサル大会

月間行事　川遊び＆釣り＆ＢＢＱ in 道志橋

ＮＡ相模原グループＯＳＭ

茨城ダルク３３周年フォーラム

７月家族会（佐藤医師）

８月家族会（湘南ダルク栗栖代表）

メンバー報告　ステージアップ（8月1日まで）

新規入寮者

トッチャン	Stage1に仲間入り！
ユウタ	Stage1に仲間入り！
ジュン	Stage1に仲間入り！

メンバー

コウチャン	Stage 2に UP！
ジェイジェイ	Stage 2に UP！
モグ	Stage 2に UP！
ニヘイ	Stage 2に UP！

スタッフ　カム　マネージャーに昇格！

施設報告　8月1日現在　利用者57名です。					
Manager 3名	Chief 2名		Trainee 4名		Support 7名
Stage1 10名	Stage2 10名	Stage3 11名	Stage4 4名	Stage5 1名	通所者 5名

活動報告

6月報告

２日　相模原ダルク定例会議
２日　相模湖病院メッセージ
４日・１１日・１８日・２５日
　北里大学病院治療プログラム（KIPP）
５日　八街少年院　薬物離脱指導
１３日・２７日
　相模原市精神保健福祉センター内
　依存症回復プログラム（FLOW）
６日　相模原市障害福祉サービス集団指導
８日　月間行事　高尾山ハイキング
１４日　駒木野病院メッセージ
１６日　神奈川県立精神医療センター
　せりがや講座（PSW）編
１７日　第一回堺地域ネットワーク会議
１７日　学校講演　神奈川県立厚木北高等学校
１９日　横浜保護観察所
　薬物再乱用防止プログラム
１６日　依存症回復者体験談　相模女子大学
２１日　相模原ダルク家族会
　講師　駒木野病院
　森下氏・西山氏・佐山医師
２３日・２５日
　水澤先生カウンセリング
２４日　多摩総合精神保健福祉センター内
　依存症再発予防プログラム(TAMARPP)
２６日　ダルク対抗フットサル大会 in 宇都宮
２８日　駒木野病院定例会

7月報告

１日　相模原ダルク定例会議
２日・９日・１６日・２３日・３０日
　北里大学病院治療プログラム（KIPP）
５日　エイサー演舞
　横浜西区保護司社会を明るくする会
７日　相模湖病院メッセージ
７日　薬物乱用防止講演　相模原田名高等学校
１１日・２５日
　相模原市精神保健福祉センター内
　依存症回復プログラム（FLOW）
１２日　エイサー演舞
　多摩養育園養護老人ホーム　竹の里
１２日　駒木野病院メッセージ
１３日　月間行事 川遊び＆釣り＆BBQ in 道志川
１４日　水澤先生カウンセリング
１６日　水澤先生セミナー
１６日　神奈川県立精神医療センター
　依存症セミナー
１７日　八街少年院　薬物離脱指導
１９日　相模原ダルク家族会
　講師　成瀬メンタルクリニック　佐藤医師
２０日　NA 相模原グループ OSM
２２日　多摩総合精神保健福祉センター内
　依存症再発予防プログラム(TAMARPP)
２３日　多摩総合精神保健福祉センター
　事例検討会
２７日　茨城ダルク３３周年フォーラム

相模原ダルク家族会のお知らせ

家族の回復は本人の回復と重なります。そのため毎月行っています。相模原ダルクスタッフ及び、外部から講師プレゼンターを招いてお話をお聞きいたします。相模原ダルク入寮者内外のご家族が集まり、勉強と交流の会（ミーティング）を開いています。依存症者の家族の方ならどなたでも参加できます。他の家族会の方も歓迎です。毎回２０名程度が参加しています。ご希望により、施設スタッフとの面談もできます。
毎月第３土曜　午後１時半～午後５時　予約不要　直接会場（相模原ダルクデイケア２階）へお越しください。＊会費として１家族２千円をいただき通信費や講師謝礼に使わせていただきます。

＜2025年４月家族会報告＞

４月19日（土）午後１時半～午後５時　35名参加（29家族）、初参加４組５名、MTG23名
講演：北里大学病院ソーシャルワーカー　左右田哲氏他

北里大学病院の医療ソーシャルワーカーをしております左右田哲（ソウダ・アキラ）です。まず「医療ソーシャルワーカー」とは何か？　今この場で医療ソーシャルワーカーと話した事がある方、いらっしゃいましたら教えていただけますか？　７名ですね。では医療ソーシャルワーカーってどんな仕事か全く知らない方は？　10名ですね。簡単に説明しましょう。ソーシャルワーカーって仕事があります。国家資格である、「社会福祉士」「精神保健福祉士」という資格で仕事している人です。それに「医療」が付くと、保健医療分野、病院とかクリニックとかで働いている人と思ってください。ではソーシャルワーカーってどんな仕事か。「業務指針」がありますが「１.療養中の心理的・社会的問題の解決援助、２.退院援助、３.社会復帰援助、４.受診受療援助、５.経済的問題の解決調整援助、６.地域活動」この６項目です。

ソーシャルワーカーは病院の中で、お医者さんがしない「心理的社会的問題等の援助」をするのですが、病院の中ではどんな事が多いかというと、「退院援助」と「経済的問題」の解決が一番多いです。北里病院や相模原中央病院は、救急車で運ばれてくる患者さんが多いです。つまり急に具合を悪くして運ばれた方に治療させていただきますが、残念ながら治療しても元の体調に戻らない患者さんもたくさんおられます。そうすると退院するには、介護保険を用いるとか、リハビリ病院に移すとか、場合によってはターミナル（終末期）の患者さんをどうするか考えます。また経済的に課題がある方、病院に入る事で仕事が出来なくなり経済的に困窮する方がいますが、その場合色々な制度を活用することがメインになります。

依存症支援に関わっていきますが、社会福祉士や精神保健福祉士の養成カリキュラムで「依存症」について学ぶことは殆どないのです。お恥ずかしい話、僕は習った記憶が全くありません。昨日も25才の職員に聞いたのですが、学校で依存症について学んだ記憶がないと言います。卒業して職場で初めて依存症支援を行うMSW（医療ソーシャルワーカー）がほとんどなのです。上司や組織による教育、職能団体による教育や、個人の資質によるしかなくて。依存症支援については全くテクニックがないのです。丸腰なのです。どういう風に回復するのか全く知らないのです。

皆さんに覚えてほしい言葉に「トリートメントギャップ」というのがあります。厚生労働省がずっと言っていることですが「我が国のアルコール依存症者の109万人のアルコール症者のうち5%しか治療を受けていない」。この「トリートメントギャップの解消」が課題です。もし癌であれば、ほぼ全員が治療を受けますよね。脳出血ならこれも９割９分の方が治療をうけられるでしょう。ところがアルコール依存症については5%の方しか専門治療を受けられていないのです。しかし依存症者の８割強が、直近１年間に医療機関、総合病院やER（救命救急センター）を受診している。つまり総合病院入院中がこの介入のゴールデンタイムなのです。（以下略）

文責：伊藤

※公式ホームページ内、最近の記録欄に詳しい報告をお載せしております。ぜひご覧下さい。

1977年12月3日第三種郵便物承認（毎月18回1・2・3・5・6・7の日発行）2025年8月24日発行 SSKP通巻第8771号

＜献金御礼＞

清水静江様　大野悦司様　匿名様

＜献品御礼＞

四反田勉様　鈴木優子様　宮ノ原みどり様　駒崎春男様　清水静江様　比留間陽子様　都筑宗子様
藤村現様　茨城依存症回復支援協会（IARSA）様　相模湖病院様　佐々木広様　仲里陽平様
小谷田郁代様　山名三枝子様　針木伸佳様　田中貢様　匿名様

＜献金・献品のお願い＞

皆さま方には暖かいご支援をいただき、誠に感謝しております。重ねてのお願いで心苦しいのですが、大所帯となり食品・日用品が常に不足気味です。お米、缶詰、調味料、石鹸、シャンプー、洗剤、等々、ご家庭で余ったもの、献品いただけると助かります。ご家族には再三のお願いをしてまいりました。改めてニュースレター読者の皆様へ、献金・献品のお願いを申し上げます。

＜振込先のご案内＞

◎郵便振替払込口座　口座名「相模原ダルク」口座番号 ００２７０－１－１３８７８８

※発送作業の簡略化の為、大変恐縮ですが郵便振替用紙は２号に１度のペースで全員の方に同封させていただいております。どうぞご理解ください。特に必要のある方、『匿名希望』の方は、その旨を通信欄に、その都度お書き下さるようお願い致します。

プログラムディレクター水澤都加佐先生より：ACE（逆境的小児期体験）と依存症からの回復

ACEに関して、クラウディア・ブラックの著書Unspoken Legacy（日本語訳「あなたの苦しみを誰も知らない・トラウマと依存症からのリカバリーガイド」金剛出版）で紹介したのがおよそ４年前、当時、一部の人を除いてあまり話題にならなかった気がする。依存症の治療現場では、「依存症の原因」と「関連する問題」とに分けて、原因が三つ（度重なる飲酒・ギャンブル・薬物摂取、遺伝的要素、大脳辺縁系の機能）と、関連する問題が三つ（生い立ち、トラウマ、未完の喪失感）とに分けて依存症を説明することが多い。原因については、すでに依存症になっている患者に対して行えることは少なく、関連する問題を治療・援助の課題として取り上げるのが一般的だ。クラウディアは、自分たちが５０年前から主張してきたことが長期に及ぶ研究で医学的に科学的に明らかになったと言っている。

編集後記：今回の体験談は、８月でクリーン１年、２年、３年の仲間です。暴力的に薬に引き込まれたり、家族に迷惑かけまくったり、その結果孤独にさいなまれたり、身も心もズタズタになった過去があっても、プログラムに従っていけば仲間とつながっていれば、回復して行けるという力強い証言です。心の回復も体の回復も両面で大事です、「愛」という言葉も照れずに使えるようになりますね。頼もしいことです。（サービス管理責任者　伊藤いずみ）

プリンシプル

相模原ダルクニュースレター NO.50

編集人 ： 一般社団法人 相模原ダルク
〒252-0237 神奈川県相模原市中央区千代田3-3-20
TEL042-707-0391　FAX042-707-0392
URL https://s-darc.com　Email info@s-darc.com
発行人 ： 特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会
〒157-0072 東京都世田谷区祖師谷3-1-17-102
定価100円